

# 國學院大學學術情報リポジトリ

The Kimura Masakoto manuscript of "Izumi Shikibu Monogatari" and its Surroundings

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Okada, Takanori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000479">https://doi.org/10.57529/00000479</a>

# 木村正辞筆本『和泉式部物語』とその周辺

— 横山由清との交流から黒川本の伝来へ及ぶ —

岡田貴憲

『和泉式部日記（物語）』の諸伝本は全四系統（三条西家本系統・寛元本系統・応永本系統・混成本系統）に分類され、このうち寛元本系統については、飛鳥井雅章筆本（東洋大学附属図書館蔵）、宝玲本（國學院大學図書館蔵）、黒川本（天理大学附属天理図書館蔵）の、三伝本の本文内容が確認されている。しかしこのほかに所在不明の伝本として、

- ・ 田中本（田中教忠旧蔵、川瀬一馬により紹介<sup>1)</sup>）
- ・ 木村本（木村正辞旧蔵、後述の横山本（横山由清旧蔵、筑波大学附属図書館蔵）に前半部校合・奥書転写）

の二伝本が従来報告されており、伝本数の少ない寛元本系統の

全容解明に向けて、その発見が長らく求められてきた。

筆者は今般、公益財団法人東洋文庫の蔵書中に右の木村本が含まれることを確認し、調査を行う機会を得た。本稿ではその結果に基づき、同本が江戸末期～明治期の国学者・国文学者、木村正辞（一八二七年～一九一三年）の筆にして黒川本からの転写本であること、横山本にみえる木村本校合が転写・校合過程でのミスを留めていること、そして木村の交流関係から黒川本伝来の手がかりが得られることについて述べる。

## 一、木村本をめぐる憶測

木村本の紹介に入る前に、この伝本をめぐる先行研究を纏めておく。木村本は、一八九〇年刊行の『日本文学全書 和泉式部日記<sup>2)</sup>』の解題に「この日記扶桑拾葉集にも収められたり。今は稿本をもと、し、木村正辞先生の蔵本なる古写本と、その他二三の異本とを以て校合せり」と言及されるように、明治期には木村正辞の所蔵本として知られていた(「古写本」とするのは前述のように誤り)。しかしその後、一九五五年刊行の『校訂新註日本文学大系 第二巻 和泉式部日記<sup>3)</sup>』の解説追補(山岸徳平担当)に、

……東京高師附属図書館—今の東京教育大学附属図書館蔵にかかる扶桑拾葉集本和泉式部日記(横山本・筆者注)の書込みが、私の注意を引いた。この書込みは木村正辞博士の筆であるが、それは後になつて、前記の寛元本の奥書と同一である事を知つた。木村正辞博士は、恐らく、その飛鳥井雅章筆の寛元本が、まだ紀州徳川家に伝来して居た頃、一見せられたのであらかうか。それらの詳しい点は、全

く記してない。只、奥書だけの記入であつた。

とあるように、およそ半世紀の間に、木村本は横山本を通してのみ知られる存在となつていた(ただし山岸の説は、奥書の付記「木村氏蔵本奥書」を無視した誤認である)。山岸は一九五九年刊行の『日本古典全書 和泉式部日記<sup>4)</sup>』の解説でも、横山本にみえる木村本奥書に触れ、

この奥書の筆者は由清ではなく旧蔵者山崎知雄であり、又「木村氏」とは木村正辞である……その後になんでこれと同様の奥書をもつ近世初期の書写本が川瀬一馬氏と吉田幸一氏によつて紹介された(黒川本と飛鳥井雅章筆本・筆者注)。そこでこの「木村氏蔵本」なるものも恐らく寛元本であらう(奥書中「尚書」の文字がないので、吉田氏蔵本の系列にあるものと思はれる)。

と述べている(後述のように、木村本奥書の転写は山崎でなく横山由清の所為)。次いで一九六四年には、『和泉式部日記』諸伝本の詳細を網羅した吉田幸一『和泉式部研究<sup>5)</sup>』が刊行されるが、木村本については横山本への奥書転写を指摘するに留

まる（同書も山岸同様に「寛元本の校異は全く見られない」と述べるが誤り）。

木村本をめぐる最も新しい言及は、一九七七年刊行の森田兼吉『和泉式部日記論攷』にみえる。同書は前掲の『日本文学全書』解題、および山岸の『日本古典全書』解説に触れた後、横山本に校合されている木村本本文の一部を検討し、以下のように述べている。

木村本との校合はかならずしも異同のすべても記すことにはなっていないようである。そして校異の取捨の基準・漢字とかなの処理の仕方など不明な点は多いけれども、その本文が寛元本系のものであることははっきりしている。……飛鳥井雅章筆本・宝玲本・黒川本のどれとも重なるものでないことも言つてよいであろう。……前半部に施された横山由清手沢本の校異だけから見ても、飛鳥井雅章筆本などの祖本であるとか、それらをさか上る本であるとかは言えそうにない。他の三本の横に並べて考えるべき本ではなからうか。

このように木村本をめぐつては、明治期以降に所在不明と

なつて後、横山本にみえる校合本文と奥書のみを手がかりとして、寛元本系統の一異本であろうとの見通しの下に様々な憶測が重ねられてきた。憶測の多くは逐一指摘したように誤りを含んでいるが、その実態について述べるにあたり、まずは木村本の書誌と伝来を確認することから始める。

## 二、木村本の書誌と伝来

木村本は東洋文庫所蔵の写本一冊（請求記号V.II-2-D-a-1017）で、書写年時は江戸末期。外題は「和泉式部物語 全」で表紙中央の題簽に墨書、内題は無い。装訂は袋綴、寸法は縦28.9cm×横19.0cm。表紙は原装で鳥の子色地に横刷目模様、本文料紙は楮紙。本文行数は每半葉八行、和歌は改行二字下げ・上下句別行。丁数は八四丁、うち前遊紙一丁で、墨付八三丁。墨付一才右下に「東洋文庫」「木村正辞図書」の蔵書印がある。墨付八三才に次の寛元本奥書がある。

書本云／存生之時不見此草子没後所見及也／老病之後狂事  
敷以養子之禪尼令／書云文章詞躰不尋常雖恥披露／暫不  
破却／前戸部以自筆如此所披書也／寛元第四五月十二依大

理典侍御命書写し

木村本には全冊にわたって複数伝本の朱書校合が施されており(一部は校合本文に対してさらに墨書で補記)、校異記号はそれぞれ次の伝本に対応する。このほか「校」「校本」の記号が「土」と同箇所に見え、出典未詳である。

・「夫」：混成本系統の扶桑拾葉集本(元禄板本)

・「土」：混成本系統の群書類従本

・「板」：応永本系統の板本(寛文板本か後刷の享保板本)

また和歌には、部分的に『和泉式部正集』による校合が施されているほか、ごく一部に墨による「古今恋四」(三〇ウ上余白)、「古今誹諧」(三三オ上余白)、朱による「夫雑一」(一四オ上余白)、「夫木雑八」(二六オ「いまはよも」歌右傍)との集付がみえる。

この木村本の旧蔵者である木村は「趣味はもつぱら古本珍本蒐集で、四万冊以上にのぼる和漢書は土蔵に「ぱい」という蒐集家であり、亡くなって間もなく蔵書目録「本居博士と木村博士 櫛斎蔵書目録」<sup>(9)</sup>が刊行されている(「櫛斎(つきのや)」は木村の号)。その「乾」冊の「物語類」に「別本和泉式部物語一巻」と記すのが木村本とみられる。

没後、木村の蔵書は「父正(養子の木村正・筆者注)が鹿兒

島や台湾等に移住したとき珍本や貴重書は親戚等にあげたので四散し、手もとに残った古書は東京大学、国学院大学等に一括納本した<sup>(10)</sup>とされるが、「一括して売りに出たのを雲村が買って、山積みにしてあったのを真ん中から二分して岩崎文庫と久原文庫に買い取らせました」(川瀬<sup>(11)</sup>)、「木村正辞先生の蔵書は、確か二万円でございます、これにもなかなか優秀品がございますが、惜しいことに全く岩崎家と久原家との両方へ割れてしまった」(村口書店主の村口半次郎<sup>(12)</sup>)との証言によれば、岩崎久彌と久原房之助の資金によって資料を収集していた鉞物学者・書誌学者の雲村こと和田維四郎を通して、纏まった量の蔵書が岩崎と久原に分蔵されたようであり、岩崎の分は後に創設した東洋文庫に「岩崎文庫」として所蔵されることとなった<sup>(13)</sup>。長く所在不明とされていた木村本は、この時に岩崎を経て東洋文庫に入った蔵書の一であり、そのまま現在まで所蔵されていたものである。

東洋文庫に収められた木村旧蔵書の全容は長く詳らかにされていなかったが、近年公開された大沼宜規「岩崎文庫所蔵木村正辞旧蔵資料目録」<sup>(14)</sup>によりその把握が可能となった。同目録に木村本は次の通り記載されている。

和泉式部物語 和泉式部 写本 1冊 26.9cm×19.1cm  
 / (VII-2-a-1017) / 書名は書題箋による。書人本(校合)。  
 印記「木村正辞図書」横刷毛目表紙使用 / 寛元4年5月  
 12日、大理典侍の命により書写した旨の識語を移写してい  
 る。

また、二〇一八年に東洋文庫ウェブサイトで公開された「東  
 洋文庫所蔵和書分類検索」によって、木村本の書誌詳細が閲覧  
 できる。これによって今回、木村本の所在が管見に及ぶ所となっ  
 た。

### 三、木村本の黒川本転写

前述したように、横山本にみえる一部特異な校合本文から、  
 寛元本系統の一異本であろうと憶測されてきた木村本だが、今  
 回の調査によってこれが黒川本の転写本であることが明らかと  
 なった。木村本は筆跡こそ模さないものの行数・字詰めとも黒  
 川本と同一に揃えてあり(図版参照)、また、飛鳥井雅章筆本・  
 宝玲本にみえる錯簡を持たないこと、寛元本系統内での独自異

文(1)を備えること等、本文面の特徴が一致することから  
 も、黒川本の転写であることは間違いない。

#### 【1】(木村本)

こゝにはちかければゆるしけなしとのたまはず  
 れはおろしこめてみそかにきけはひるは人々院  
 の殿上人なとまいりあつまりていかにそかくて  
 はありぬへしやちかをとりにいかにせんとおもふ  
 こそくるしけれとの給はずれば

(七五ウ〜七六オ)

#### (黒川本)

こゝにはちかければゆるしけなしとのたまはず  
 れはおろしこめてみそかにきけはひるは人々院  
 の殿上人なとまいりあつまりていかにそかくて  
 はありぬへしやちかをとりにいかにせんとおもふ  
 こそくるしけれとの給はずれば

(七五ウ〜七六オ)

#### (雅章筆本)

こゝにはちかければゆかしけなしとの給はずれ  
 は<sup>15)</sup>

木村本墨付一オ

(公財)東洋文庫蔵



黒川本墨付一オ

(天理図書館蔵)



ただし木村本が墨書するのは、前述の校合に対する補記を除けば本行本文のみであり、黒川本にみえる墨書の注記類は、校合と同様に朱で施してある。<sup>16)</sup>なお黒川本には朱書による扶桑拾葉集本(元禄板本)の校合が施されているが、これは後述する旧蔵者・小田清雄による、木村の転写よりも後年の所為と考えるのが妥当である。

木村本の本行本文については、黒川本との漢字・仮名表記の違いが散見するほか、部分的に誤字脱字・注記本行化・改変が認められる。とりわけ注意されるのが改変であり、改変後の本文と朱書校合に用いられた伝本(元禄板本・応永板本)とが一致する箇所〔2〕〔3〕〔4〕のあることから、これらが校合を施した者と同一の人物による、親本書写時の無意識の転訛

であると推測される。本稿冒頭で、木村本は木村正辞の筆と述べた所以である(前記「東洋文庫所蔵和書分類検索」にも「木村正辞自筆校合」と記載されている)。

〔2〕(木村本) けふのなかめにみつまさらなむ(二四オ)

(黒川本) けふのなかめにみつまさるらん(二四オ)

↓元禄板本・応永板本ともに「まさらなん」

〔3〕(木村本) よひことにかへしはすれといかてなを(二九ウ)

(黒川本) よひことにかへしはすともいかてなを(二九ウ)

↓元禄板本・応永板本ともに「すれと」

〔4〕(木村本) いか、とはわれこそおもへあさなく(二二オ)

(黒川本) いかにとはわれこそおもへあさなく(二二オ)

↓元禄板本・応永板本ともに「いか、」

このように、木村正辞の筆による黒川本の転写本と考えられる木村本だが、木村はどのような事情で黒川本に接し、転写を行ったのだろうか。この問題は、横山本における木村本校合の時期と深く関わるので、ここで横山本の詳細について確認する。

#### 四、横山本の木村本校合

筑波大学附属図書館所蔵の横山本は、木村と同時代の国学者・歌人である横山由清（一八二六年～一八七九年）の旧蔵本であり、没後に佐佐木信綱の手を経て、一九一七年（目録丁の受入印による）に現所蔵先の前身である東京高等師範学校に収められたものである。その書誌は『筑波大学和漢貴重図書目録』<sup>(18)</sup>に次の通り記載されている。

一七四 和泉式部物語（和泉式部日記） 一卷 一冊（ル170<sup>1</sup>50準）／〔江戸時代後期〕写。横山由清自筆校合書入本。  
 ／題簽・和泉式部物語 全。／墨付五六丁。縦二六・四cm、横一八・二cm。袋綴。／識語・嘉永七（一八五四）年三月十日以一刊本校合畢 横山由清（朱）。／扶桑拾葉集本を行数・字詰・字形など殆ど同じに書写し、これに寛元本・群書類従本・享保版本・夫木抄などによって校合し朱墨筆による頭註などを付したるもの。巻末に「木村氏蔵本奥書」として寛元本の奥書を綴じられている。この奥書の筆者は旧蔵者山崎知雄であり、木村氏は木村正辞。／印記・月能

屋（横山由清）。山崎氏蔵書記（山崎知雄）。

ここに記されるように、扶桑拾葉集本（元禄板本）の写しである横山本には朱書・墨書による多数の校合が施されている。校異記号の概要は、墨付一オにみえる次の頭註から知ることができる（通し番号は筆者による）。

- ①イ 拾葉集所校一本
- ②山
- ③イ 享保刊本 イ／イ 同一本
- ④ル 類従本 三百廿
- ⑤木
- ⑥木イ

このうち①②は墨書、③④⑥は朱書である。①は扶桑拾葉集本（元禄板本）が持つ異文注記。②は説明を欠くが、現存諸本と一致しない箇所が多く、旧蔵者である国学者の山崎知雄（一七九八年～一八六一年）による私見と考えられる。③は応永本系統の享保板本で、「イ／イ」は同板本が持つ異文注記。④は群書類従本。残る⑤が木村本、⑥が木村本を持つ異文注記

(実際は前述の通り混成本系統・応永本系統による校合本文)である。なお⑤の下に鉛筆で「夫木抄」の文字が見えるが、これは⑤に対応するものでなく、作中歌に対する『夫木和歌抄』の校合を示すものである(このほかに作中歌には『和泉式部集』『和泉式部続集』の校合もみえる)。

この頭注を検すると、①②の墨書と③④⑥の朱書は別筆であることが分かり(ただし①の「拾葉集所校一本」は朱書と同筆)、前者が山崎、後者が横山の筆と判断される。従って、山崎が元禄板本を書写して私見の注記を施した本を、後に横山が入手し、新たに享保板本・群書類従本・木村本・『夫木和歌抄』・『和泉式部集』・『和泉式部続集』によって校合したものが、横山本ということになる。

また、横山本の末尾に綴じられた別紙に転写されている木村本奥書をめぐっては、前掲の山岸『日本古典全書 和泉式部日記』と『筑波大学和漢貴重図書目録』が山崎の筆とするが、これは誤りであり、やはり横山の筆と認められる。木村本奥書の付記「木村氏蔵本奥書」(墨書)の筆跡は、墨付五六ウに転写された享保板本刊記の付記「イ本奥書云」(朱書)と全く同一であり、ともに横山の識語と同筆である。

この見通しは、木村と横山の交流関係によっても裏付けられ

る。<sup>20</sup> ともに伊能穎則に国学を学んだ同門生であった木村と横山は、一八六〇年より国学者の間宮永好・小中村清矩を交えて『万葉集』の会読を行っており、後には揃って和学講談所の教授となったほか、一八七一年には両名を総裁とする『官版語彙』(編輯寮)が刊行されるなど、公私ともに長い交流関係にあった。こうした関係の中で、木村本の横山への貸与がなされたと考えるのが穏当な推論であろう。

これに対し山崎は、木村とも関係のあった国学者・黒川春村(一七九九年〜一八六六年。木村は一八五七年以降、春村の蔵書を閲覧・書写している)とは親交を持っていたものの、木村本人との直接の交流は確認できない。一方、横山は山崎の書写した『続日本後紀』(国立国会図書館蔵)を入手し校合を加えていることから、山崎の蔵書に接触できる間柄だったとみられ、その中で山崎書写の扶桑拾葉集本を手に入れたことが推測される。

横山本における木村本校合は墨付二八才一行目まで施されている。校合は全異同に及ばないものの詳細であり、校合箇所は四〇〇余を数える。森田『和泉式部日記論攷』はこのうち墨付三ウ九行目までの五〇箇所を検討し、三箇所〔5〕〔6〕〔7〕の校合本文をもとに「飛鳥井雅章筆本・宝玲本・黒川本のどれ

とも重なるものでない」と述べたが、それらは以下の通りいずれもミスに過ぎないことが今明らかになった。木村による黒川本転写時のミス、横山による木村本校合時のミスは、このほかにも校合箇所全体に散見する。

〔5〕(横山本) かのわらははかくれのかたに (二ウ)

(木村本) そのわらははかくれのかたに (三オ)

(黒川本) そのわらははかくれのかたに (三オ)

↓黒川本傍線部を「こ」と誤刻し、木村本を独自異

文と判断した森田のミス。

〔6〕(横山本) もとも心ふか、らぬ (三オ)

(木村本) もとも心ふか、らぬ (四オ)

(黒川本) もとも心ふか、らぬ (四オ)

↓木村本傍線部に校合本文「の土」とあり、校合時

に「木イ」と記さなかつた横山のミス。

〔7〕(横山本) 御返もときききこゆ (三オ)

(木村本) 御返し時ききこゆ (四オウ)

(黒川本) 御返も時ききこゆ (四オウ)

↓黒川本傍線部を誤写した木村のミス。

この横山本への木村本校合がいつ行われたか、正確な特定はできないが、墨付五六ウには他本の校合完了時の日付が以下の通り記されており、そこから大凡の時期を絞り込むことができる。

・識語 嘉永七年三月十日以一刊本校合畢 (朱書)

・頭注 安三六十八以類従本校合了 (朱書)

右和泉式部日記に扶桑拾葉集校合了 (朱書、群書類

従本の刊記を写したもの)

同月廿三日以家集及続集校合了 (墨書)

七月八日以夫木抄校合了 (墨書)

これによれば、横山は一八五四年までに山崎書写本を入手し、同年に享保板本を校合、三年後の一八五七年に群書類従本『和泉式部集』『和泉式部続集』『夫木和歌抄』の校合を終えたことが分かる。前掲墨付一オの頭注にみえる記号順から、木村本の校合はこれ以降の所為とみられ、それは先に確認した木村と横山の交流が一八六〇年以降盛んになったこととも符合する。木村本校合は、一八五七年から横山の没する一八七九年までの間に行われたと推測され、このことは必然的に、木村による黒

川本転写もまたそれと近い時期に行われたことを意味する。こうした経緯を踏まえて、先に提示した黒川本転写事情の問題について検討してみたい。

## 五、黒川本の伝来

黒川本は一九五九年（前見返しへの受入印による）に現所蔵先の天理大学附属天理図書館に収まったが、蔵書印の類や識語から次の旧蔵者が明らかになっている。

①日野家：墨付一才右肩に「日野庫」印。

②小田清雄：前遊紙才左下・墨付一才右下に「小田」印。表紙に「小田清雄書入本」と記し、墨付八二才に「以扶桑拾葉集本加一校了／明治十四年五月十二日夜」の識語を記す。

③黒川真道：墨付一才右下・墨付八三ウ左下に「黒川真道蔵書」印。表紙に「物語」印。

④フランク・ホーレー：墨付八三ウ左下に「寶玲文庫」印。

成立事情未詳の黒川本は、ある時期から名家の資格をもつ堂上家・日野家の蔵書となった。同本は、一六八〇年に後西上皇へ献上された『扶桑拾葉集』の収録本文作成に用いられており、それは献上に関わった日野弘資を通じての貸与であったと考え

られることから、彰考館で『扶桑拾葉集』の編纂が始められた寛文年間（一六六一―一六七三年）には、黒川本は日野家に蔵されていたと推測される<sup>21)</sup>。

黒川本が日野家から流出した時期は詳らかにしないが、遅くとも一八八一年には国学者・神職の小田清雄（一八四八年―一八九四年）の所蔵に帰していた。その後、同本は現呼称の由来である黒川真道（一八六六年―一九二五年）の蔵書となるが、同本には真道の父・真頼（一八二九年―一九〇六年）の印が捺されておらず、また一八八七年真道校了の識語を持つ黒川家の蔵書目録『書籍目録』<sup>22)</sup>に掲載されていないことから、蒐書家として著名な真頼の蔵書ではなく、小田の亡くなる前後に真道が入手したものと推定される。

永田清一「黒川文庫」<sup>23)</sup>によれば、右目録所載の黒川家蔵書を収めていた三つの土蔵（天・地・人）のうち、「天」「地」蔵は一九二三年の関東大震災で焼失し、「人」蔵の蔵書と「天」「地」蔵に焼け残ったごく一部も、「古書店に流れたものと家族の手許に置かれたものがあつたが、第二次大戦後の混乱とインフレで家族の手許にあつた資料も手放さなければならなくなつた」。戦後に手放された大部分は最終的に宮内庁書陵部・実践女子大学・ノートルダム清心女子大学に購入されたが、その過

程で筒井久太郎の手を経ており、筒井が入手していた黒川家蔵書は「『人』の蔵の約半分」（永井前掲論文）に及ぶとされる。そして問題の黒川本もその中に含まれていたことが、一九四八年頃に筒井の許で黒川本を見した川瀬の言から知られる。<sup>25</sup>

川瀬『講談社文庫 和泉式部日記』の解説には、

私は辞去する際、筒井氏にこの和泉式部日記と方丈記二種との拝借を願って持ち帰った。詳細に本文を校合しようと思いつながら果さずにいると、筒井氏から和泉式部日記だけ見たいという人があるから返してくれと言つて来られた。私はつい怠つていたので、早速急いで校合をはじめ、その日、夜半十一時半までかかつて丹念に毛筆で校合を遂げた。それは昭和二十四年九月二十九日である。

と記されるが、この時筒井から黒川本を購入したのが英国人言語学者のフランク・ホーレー（一九〇六年～一九六一年）だったと考えられる。当時ホーレーは、戦時に接収された蒐書（一九三一年の来日から一九四一年の英国送還までのもの）の回収に勤しむ傍ら、新たな図書の収集に励んでいたが、後に経済的事情から蔵書の一部を手放していた。<sup>26</sup> 黒川本も戦後に入手

しながら手放した蔵書の一であり、ホーレーの入手から十年ほどで現所蔵先へ（吉田『和泉式部研究二』によれば「東京村口書房を経て」渡ることとなった。

以上の伝来をまとめると、

日野家（一六八〇年以前～不明）：↓小田清雄（二八八一年以前～一八九四年頃）↓黒川真道（二八九四年頃～一九四八年以前）↓筒井久太郎（一九四八年以前～一九四九年頃）↓フランク・ホーレー（一九四九年頃～一九五九年）↓天理大学附属天理図書館（一九五九年～）となり（丸括弧内は入手時期～放出時期）、木村が黒川本を転写したと推測される一八五七年～一八七九年頃は、このうち日野家と小田との間にちように該当する。木村が日野家と関わっていた記録は確認できないため、黒川本は当時すでに日野家を離れていたとみられ、その時期の所蔵者を推定するにあたり、木村本の存在は大きな意義を持つことになる。

判明している旧蔵者の中では、黒川真道が木村と最も近い間柄にあつたことが知られている。真道の父・真頼は前述した黒川春村の養子で、文部省での木村の同僚として『官版 語彙』の編集に携わっており、木村は真頼の蔵書を閲覧しているほか、真道とも蔵書の受贈・貸借関係にあつたなど、<sup>27</sup> 木村と黒川家は

書物を介して三代にわたる交流を保っていた。こうした関係からは黒川本の貸借も想像したくなるが、真道が黒川本を入手した時すでに横山は亡くなっており、黒川本が真道以前に黒川家の蔵書であった形跡も前述の通りみられないため、木村が転写した時の黒川本所蔵者は別に推定する必要がある。そこで考えてみたいのが、真道以前の所蔵者である小田と木村との関係である。

堺出身で平田鐵胤・六人部是香に師事した小田は、堺県学問所への勤務後、大阪の枚岡神社・金岡神社の神職を務めるなど、生涯を関西圏に過ごした人物であり、その名を木村の交流記録の中に見出すことはできない。しかし、一八八二年に明治政府によって神職の中央機関である皇典講究所が創設されて以降、両者の間に接点が生まれる。小田は一八八三年より住吉大社主典（一八八七年）、一八八六年より皇典講究所大阪府分所受持委員補を務めるが、同時期に皇典講究所の録事を掲載していた『会通雜誌』（会通雜誌社、一八八五年創刊）や、同所が母体となって刊行された『日本文学』（日本文学発行所、一八八八年創刊）、およびその改題誌『国文学』（国文学会）などには、寄稿者として木村と小田の両名が確認され、また皇典講究所において一八八八年十二月より行われた公開講演の記録

『皇典講究所講演』にも、講演者として両者の複数回の参加が確認される<sup>(29)</sup>。さらに木村を賛同者として一八八六年に創立された大八洲学会にも、小田は翌年入会し、以後『大八洲学会雑誌』に幾度も小文を寄せている。こうした活動を通して両者が面識を得た可能性は十分にあり、小田の元にあった黒川本が真道へ渡った背後に、双方と面識のあった木村の助言が働いたと考えられることも、強ち無理な想定とは言えないであろう。

ただし、これらの接点はいずれも小田が黒川本に識語を記した一八八一年よりも後のことであり、当時は堺区役所に奉職していた小田と、東京大学の教員であった木村が面識を持っていたとは、到底考えられない。小田が横山の亡くなる一八七九年以前から黒川本を所有していたとしても、それを木村が転写したと考えるのは難しく、小田以前の所有者として、木村に関わりのあった別の人物を想定しなければならぬ。

そこで小田に関係する人物について精査すると、木村とも交流の認められる人物としてただ一人、小田の最初の師であった平田鐵胤が確認できる。平田篤胤の養子にして彼の後継者となった平田鐵胤は、一八六九年七月の明治政府による大学校（文部省の前身）設立に際して、教官の最高職階である大博士に任命され、翌年七月の依願免官までその任を務めていた<sup>(30)</sup>。そして

この時期、鐵胤の下に連なる国学教官の一人だったのが、一八六九年七月に大助教として任ぜられ、同年十二月に少博士へと進んだ木村であった。<sup>②③</sup> わずか一年ではあるが、両者は職業上の関わりを持っていたのであり、しかもそれは、黒川本転写が行われたであろう一八五七年〜一八七九年の間に収まっているのである。

さらに、鐵胤は一八八〇年に没しているが、それは小田が黒川本を入手していた一八八一年に極めて近接している。こうした条件に基づき、鐵胤が黒川本の所蔵者だったと仮定すると、一八六九年以降、鐵胤と関わりを持った木村が同本を転写し、それを借用した横山が、亡くなる一八七九年までの間に横山本へ校合したと考えて何ら支障がないのであって、また鐵胤の没後に小田が黒川本を受け継いだと考えることも可能になるのである。

この想定は、前述した小田と皇典講究所との関わりによっても支えられる。小田が寄稿していた皇典講究所関連の媒体を繙くと、当時著名の国学者であった木村のような中央の大家や、東京大学・皇典講究所出身者が名を連ねており、神職や分所受持委員補を務めていたとは言え、一八八〇年代にはまだ一地方の国学者に過ぎなかった小田の存在は、特異であることに気づ

かされる。そのような彼が、住吉大社を辞して奈良県尋常師範学校の教員を務めていた一八八八年以降、『皇典講究所講演』の講演者となるに至った背後には、小田と皇典講究所とを結びつけた人物がいたと想像されるが、果たして皇典講究所の創設に関わった人物の中には、平田鐵胤の門下にあつた井上頼国（一八三九年〜一九一四年）、松野勇雄（一八五二年〜一九三一年）らの名を見出すことができるのである。<sup>②④</sup> 小田の皇典講究所への関わりが、こうした鐵胤門下生との交流に基づくものであるならば、彼が鐵胤の没後にその蔵書に接した可能性もまた、大いに認められてよいのではないか。

唯一の難点は、鐵胤が用いていた「平田氏記」の蔵書印が黒川本には捺されていないことだが、現在は国立歴史民俗博物館が所蔵する平田篤胤関係資料（篤胤以降の子孫に伝来した資料群）について目録を検すると、同蔵書印を捺さない書籍類も少なからず見受けられ、蔵書印の不在は必ずしも障害にならないと言える。以上の事柄によって、木村が転写した時点での黒川本の所蔵者としては、平田鐵胤を推定しておくのが最も有力であり、木村による転写は両者が同僚となった一八六九年以降、横山が没する一八七九年以前の早い時期に行われたと考えられるのではないだろうか。あくまで憶測の域を出ないものの、現

時点までの傍証に基づく一説として提示する次第である。

従来、黒川本の旧蔵者をめぐっては、日野家を離れてから小田の手に入るまでの事情について、一切の手がかりが得られない状態であった。今回明らかになった木村本の実態から右のように推測することが許されるならば、小田以前の所蔵者がある程度絞り込んでゆくことが可能になる。その際、黒川本墨付一オにみえる糸印<sup>2)</sup>を所有していた人物についても精査を続けることによつて、より一層の特定が見込まれよう。

寛元本系統の一異本と憶測されていた木村本が、実際は黒川本の転写であったことは、同系統本文の分析に結びつかない点では惜しまれるが、同本を媒介とする人物関係から黒川本の伝来事情に迫ることができ、ひいては明治期国学者のネットワークの解明に寄与するという点において、木村本が伝存する意義は極めて大きい。木村本の所在が明らかになった今、寛元本系統の残る未詳伝本は田中本のみとなり、引き続きその探索が求められる。

(注)

(1) 川瀬一馬「和泉式部日記は藤原俊成の作」(『青山学院女子短期大学紀要』第二号、一九五三年九月)に、「なほ他の同種の一伝本、田中家旧蔵本も亦、寛永頃の書写と認められる美濃大本の、やはり麗しい達筆の一本であつて、上の日野家旧蔵本(黒川本・筆者注)と同じ頃に筆写せられた公卿写本に相違ないと思ふ」と記す。同論文は続けて「(横山由清などもこの一本を見て校正してある事実があるが、単に校合に終わつてゐるのである。)」と記すが、本稿で述べるように横山本に校合されているのは木村本である。なお川瀬は『講談社文庫 和泉式部日記』(講談社、一九七七年)の解説で、

昭和九年の夏であつたと思うが、京都の田中家の蔵書を全部審定し且つ評価して欲しいとの依頼を受けて、日野の別邸へ赴き実に夥しい貴重書を拝見した中に、和泉式部日記の寛永頃の公卿写本があつて、これまで見た本とは変つた奥書に気付いたので、ノートにそれを書き記したが、うち見た処、本文の方は「夢よりもはかなき」で始まり、終末の部分なども亦同じであつた。

と述べており、田中本が京都府伏見区日野に別宅を持った田中教忠(一八三八年―一九三四年)の旧蔵書であつたと知られる。後に川瀬の作成した「田中教忠蔵書目録」(田中穰、一九八二年)には田中本の記載はなく、蔵書が調査された一九八〇年(同書まえがきによる)以前に手放されたものと思われる。

(2) 落合直文・萩野由之・小中村義象校訂『日本文学全書 和泉式部日記』(博文館、一八九〇年)。校訂者はいずれも木村の東京大学着任後の入学生である。

(3) 久松潜一・山岸徳平監修『校訂新註日本文学大系 第二卷 和泉式部日

- 記」(風間書房、一九五五年)。
- (4) 山岸徳平校註『日本古典全書 和泉式部日記』(朝日新聞社、一九五九年)。
- (5) 「奥書中『尚書』の文字がないので」とは川瀬前掲注(一)論文所載の黒川本奥書「前戸部尚書自筆如此所被書也」を踏まえたものだが、これは川瀬の引用ミスであり、実際は奥書に「尚書」の二字は無い(飛鳥井雅章筆本・宝玲本も同様)。川瀬は後の『新註国文学叢書学生版和泉式部日記』(大日本雄弁会講談社、一九五六年)では正しい黒川本奥書を掲載している。また『講談社文庫 和泉式部日記』の解説に掲載された田中本奥書にも「尚書」の二字は無く、黒川本の奥書と同一であったと述べている。
- (6) 吉田幸一『和泉式部研究一』(古典文庫、一九六四年)。
- (7) 森田兼吉『和泉式部日記論攷』(笠間書院、一九七七年)。
- (8) 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第十三卷(昭和女子大学光葉会、一九五九年)所収「木村正辞」より、孫の木村正巳氏の談。
- (9) 「本居博士と木村博士 欄齋蔵書目録」(『大八洲』第二卷第八号、一九一三年)。この目録の末尾には「この欄齋蔵書目録乾坤二冊は、木村博士自筆のものなり、外に、統欄齋蔵書目録なるもの二冊あり、されどこの統編には、現今の活板物にも交りをれば、こたひは、省きぬ」との説明があり、木村が生前に作成したものと知られる。大沼宜規「木村正辞と旧蔵本の特徴―岩崎文庫所蔵資料を中心として―」(『岩崎文庫貴重書誌解題Ⅳ』東洋文庫、二〇一〇年。礎稿の初出は二〇〇四年)によれば、この目録の作成時期は「木村正辞の八五歳の祝宴に先立つ明治四四年六月七日に明治天皇に献上された『御注孝経』(宮内庁書禮部所蔵。請求記号特一〇九)などの資料が著録されていることから、明治四四年以降木村が歿する大正二年迄と推定される」。
- 木村の蔵書目録にはほかに、「書籍目録」(東洋文庫蔵『欄齋編著書』収録。一八八三年頃作成。古典籍は含まず)、『欄齋蔵書函号続目録』(天理大学附属図書館蔵。おおむね木村自筆)、『欄齋蔵書目録』(京都大学附属図書館蔵・大東急記念文庫蔵。大東急本は京大本の写。木村没後の作成か)がある。
- (10) 前掲注(8)の木村正巳氏の談。
- (11) 川瀬一馬『日本における書籍蒐蔵の歴史』(ベリかん社、一九九九年)。
- (12) 「酒竹文庫及び和田維四郎氏」(反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』(八木書店、一九九〇年)。
- (13) 東洋文庫は岩崎久彌の蒐書を三期(一九三二年・一九四三年・一九五〇年)に亘って受贈している(東洋文庫ウェブサイトの記載による)が、そのうち目録が作られたのは『岩崎文庫和漢書目録』(東洋文庫、一九三四年)に記載された一九三二年受贈のみ。木村本は墨付一才上部の受人印より一九四三年七月二四日の受贈本と分かる。
- (14) 大沼宜規「岩崎文庫所蔵 木村正辞旧蔵資料について―解説と目録―(上・中・下)」(『東洋文庫書報』第三五号〜第三七号、二〇〇四年三月〜二〇〇六年三月)所載。
- (15) 以下、木村本・黒川本・横山本以外の『和泉式部物語』伝本の本文は、岡田貴憲・松本裕喜編『和泉式部日記/和泉式部物語』本文集成』(勉誠出版、二〇一七年)による。
- (16) 黒川本にはほかに付箋貼付による注記も散見し、木村本の該当箇所には「夕くれは」(六六才。黒川本は「かのくれは」に「夕」と付箋注記のような注記本行化が一部にあるもの、これが付箋の内容に従ったものか、あるいは付箋の典拠である応永本板本・元禄板本に従ったものかは不明である。なお本行への採用箇所以外はすべて「土」などの記号を伴う朱書注記となっている)。
- (17) 大沼宜規「国立国会図書館所蔵横山由清旧蔵書について」(『参考書誌

「研究」第六五号、二〇〇六年十月)。同論文所引の幸田成友「横山先生に就いて」(横山由清『日本田制史』大岡山書店、一九二六年)によれば、横山の旧蔵書は「歿後御遺族の手によつて悉く保存せられた所、大正四年佐佐木信綱氏が同家と深き縁故あるによつて悉皆引請けられ、その一部は整理処分、一部は東京大学法学部に寄託されたという。

(18) 『筑波大学和漢貴重図書目録』(筑波大学附属図書館、一九九六年)。

書誌執筆は同館の高木三男による(編集後記より)。同書は『筑波大学和漢貴重図書目録稿—旧分類の部—』(筑波大学附属図書館、一九八七年)の改訂版だが、横山本の記載内容は同一。

(19) 扶桑拾葉集本(元禄板本)の写しである横山本は本文の前に目録一丁を備えるが、本稿ではこれを除いた丁数を示す。

(20) 以下、木村と横山の経歴は、「東京学士会院会員木村正辞伝」(『東京学士会院雑誌』第十五篇第七冊、一八九三年七月)、大沼宜規「旧蔵書の識語にみる木村正辞—書物をめぐる活動記録稿—」(『東洋文庫書報』第四〇号、二〇〇九年三月)、前掲注(8)書、大沼前掲注(17)論文による。また山崎の経歴は『国学者伝記集成』(大日本図書株式会社、一九〇四年)による。

(21) 岡田貴憲『扶桑拾葉集』所収「和泉式部物語」の本文—主要伝本の関係と諸本混成の実態—(『国語国文』第八五卷第二号、二〇一六年二月)。

(22) 城田秀雄「黒川真頼蔵書目録影印(一)」「(八)」「実践女子大学文学資料研究所『年報』第八号」第一五号、一九八九年三月—一九九六年三月—による。

(23) 永田清一「黒川文庫」(『実践女子大学文学部紀要』第二三集、一九八一年三月)。

(24) 『ノートルダム清心女子大学付属図書館 特殊文庫目録』(ノートルダ

ム清心女子大学付属図書館、一九七五年)による。

(25) 川瀬「講談社文庫 和泉式部日記」解説、および川瀬前掲注(11)書。なお筒井久太郎については、「座談会 黒川文庫の過去・現在・未来」(『実践女子大学文学資料研究所年報』第三〇号、二〇一一年三月)に、

「『誠堂の先代社長から聞いた時には、『市川か船橋』という言い方をしていたが、それが米屋さんだということだけは聞いていました」(佐藤悟)との言及がある。

(26) 横山山「書物に魅せられた英国人—フランク・ホーレーと日本文化—」(吉川弘文館、二〇〇三年)。

(27) 大沼前掲注(20)論文による。

(28) 以下、小田の経歴は大川茂雄『国学者伝記集成 続篇』(国本出版社、一九三五年)、「堺市史第七卷(堺市役所、一九二九年)による。

(29) 『云通雑誌』には木村が第六八号(一八八八年)以降四回、小田が第二八号(一八八六年)に一回詩歌を寄せており、『日本文学』『国文学』には木村が第三号(一八八八年)以降十回、小田が第十三号(一八八九年)以降九回、いずれも断続的に寄稿している。また『皇典講究所講演』(一八八九年—一八九六年)所載の全一八〇回の講演のうち、木村の講演は一九回、小田の講演は二回を数える。なお『日本文学』『国文学』『皇典講究所講演』の詳細については、深谷和男「明治の国文学雑誌—『皇典講究所講演』と『国学院雑誌』—」(『名古屋大学文学部研究論集』第四六号、一九六八年三月)、阪本是丸「皇典講究所関係出版物に関する一考察」(『国学院大学学術研究開発推進センター』編『史料から見た神道—国学院大学の学術遺産を中心に—』弘文堂、二〇〇九年)、藤田大誠「明治二十年代における皇典講究所—国学院の出版活動—」(『日本文学』『国文学』『皇典講究所講演』絵目録解題—)、『国学院大学伝統文化リサーチセンター研究紀要』第一号、二〇〇九年三月)および藤田・上西亘『日本文学』『国文学』『皇典講究所講演』

総目録」(同上)を参照。

(30) 『大八洲学会雑誌』に小田は第十九号(一八八八年)以降六回寄稿している。なお『会通雑誌』第十七号(一八八六年五月)の「社説」には大八洲学会の加入案内が載り「本居久米小杉等の諸君これか主となり千家福羽高崎丸山田中小中村木村黒川矢野栗田の諸君これを賛成せられたり」と記すが、多くは皇典講究所の関係者である。

(31) 中川和明「平田篤胤の著書と国学運動」(『平田篤胤関係資料目録』国立歴史民俗博物館、二〇〇七年)による。

(32) 前掲注(20)の「東京学士会院会員木村正辞伝」による。

(33) 國學院大學日本文化研究所編『國學院黎明期の群像』(國學院大學日本文化研究所、一九九八年)による。

(34) 「日野庫」印と「天理図書館蔵」印の間に捺された印。これと同じ印影は、松平定信編『集古十種 印章二』(一八〇〇年刊)、山中共古「糸印譜 其十七」(『集古会誌 巴西卷二』集古会、一九〇九年)にみえるほか、早稲田大学図書館蔵の島田三郎旧蔵『弘仁歴運記考 上之巻』(請求記号135-02163)にも確認できる。糸印とは「室町時代から江戸初期にかけて、明から輸入した生糸の糸荷につけてきた文字を刻んだ銅印」(『日本国語大辞典』)とされ、形状・印文(文字や図案)ともに多様、かつ同一印面ながら異なる紐(つまみ)を持つものが多く、黒川本の印と他資料の印との関係は未詳。

付記 本稿で掲出する『和泉式部物語』伝本の本文・図版は、以下の原本や複写資料による。貴重な資料の利用に際し、ご高配を賜った各所蔵機関に御礼を申し上げます。

・ 木村本…東洋文庫所蔵の原本(VII.2-D-a-1017)。図版は同文庫より頒布を受けたデジタルカメラ撮影からのプリントによる。

・ 黒川本…天理大学附属図書館所蔵の原本(91.4.34/43)。図版は同館

より頒布を受けた紙焼写真による。

・ 横山本…筑波大学附属図書館所蔵の原本(L170-00)、同館ウェブサイト上で公開のデジタル画像、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルム(6-992)。